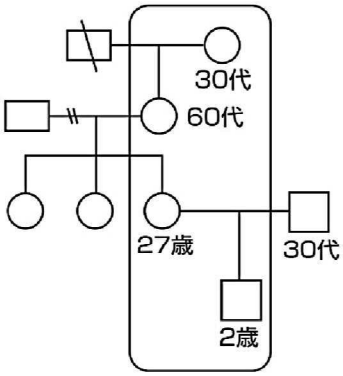
里帰り出産事例への支援

― 誰がメインで支援するべきか ―



女性相談所から育児ストレスがあるようだから母子保健の立場から育児支援に入って欲しいと依頼があった。保健師が母親に連絡を取る前に母親本人からすぐに電話があった。

第２子の里帰り出産で第１子を連れて、県外から母親の実母が介護をしている母親の祖母（子どもたちの曾祖母）の家に戻っていた。離婚しようと話が出ている時期に第２ 子を妊娠して里帰り出産と言うことになった。

初回訪問は２時間半くらい、母親は泣いたり笑ったりしながらしゃべりまくっていた。母親は自分が子どもの頃に母が忙しくて可愛がってもらえなかったと訴えていた。

その時点で、「あ、これはちょっと・・・・」。なんかちょっともう、久々の、雰囲気を持ったこのケースだったので。こんなふうに表に自分の感情をワーッと出す、あまりいなかったんですよ、それまで、こちらから意図的にちょっとお話しして、聞き出すみたいな感じの関わりが多かったので。

子どもの健診、妊娠中の健診は受診していた。「子どもが可愛く思えない」というのはしょっちゅう言っていた。第１子は寝起きも良く、お利口さんの子だった。可愛くないというお母さんの発言がとても多くて、発作的に何か起こらないかと保健師は不安になってきた。

お母さんのところに抱っこされたがって来ると、お腹が大きいですから、のけっちゃたりする。それで、言ってることとやっていることは、やっぱりあっているなっていうのが、その時わかった。お母さんが大きな声を出したときに、時々この子がビクッとした感じにはなっていたので、たぶん日常的に、言葉だとか何かあったんじゃないかとは思うんですけど。

お母さんは「なんかもう、ちょっとイライラしたときには何かものを投げたりとか、つねったりとかした」ていうんですよ。でも、「健診とか、病院で見せたときに誰もなんにもいわなかった」ていっていた。

里帰り出産で戻っている間に協議離婚が成立し、今後どこに住むかはっきりしていなかった。母親は実母が介護前に住んでいたＡ市にアパートを借りたい、県外に戻るなどといっていたので、転居先の保健師にも相談ができるようにしておこうと、母親の了解を得て情報提供書を渡しておいた。その後、県外の地区担当保健師と学会の会場で会う機会があった。顔合わせしておいて、「何かあったときに、すぐ対応できるようにしておきましょう」という話をした。

たまたま、土曜日に残業で出勤していた。突然、このお母さんから泣きながら電話がかかってきた。

泣きながら「今お風呂場で上の子の頭をゴンゴン壁にぶつけている」っていったんです。私は「へ？」「えっ？」ておもって、「えっ？」て言っちゃいけないと思って必死に押さえて「あ、そうなの？どうしてそういうことになったの？」て言ったら、「なんかわからないけど、もう、むしゃくしゃして、もう抑えきれない、もうどうにかなってしまいそう」っていう発言でした。「お姉ちゃんにも電話したけどつながらなくて、それで〇〇さんを思い出して電話した」、で、「あ、そうなの、電話をありがとう」って、「ちょっと待っててね、切らないでね、そのままにしていてね」、といって、県外の保健所の担当保健師に電話をした。

連絡した保健所で児童相談所に連絡し、一時保護になった。「保護しました」という連絡をもらうまでそこに座り込んでしまった。腰が抜けるってこういうことなんだと思った。母親の姉からも「大丈夫でした。間に合いましたよ」っていう第一報をもらって、ホッとした。

里帰り出産で、こちらに来ているときは母親の話を傾聴するという支援で、周りからはこんなに時間をかけるのか、どこまで支援をするか整理した方が良いという話も出ていた。しかし、母親の中でいろいろな物がグルグル渦巻いて、とても苦しんでいると感じた。距離を置いてしまうと心配という感じでした。だから、連絡は取れるようにしておこうと、最初にあったときに思った。

かかわっているときは大きなことは起こらなかったけど、私は起こるんじゃないかと私はドキドキしながら考えていたはずなのに、いざ起こった時にはショックでした。起こらないように、起こらないようにって支援していたはずなのに、やっぱり起こってしまったかみたいな。でも、連絡が取れて取りあえずよかった、みたいな感じ。もし、事件が起こらなければ、ああいうふうにして一生懸命ひたすら聞くだけよかったんだて私の中であったと思うんですが。でも、やっぱりそうはいかない何かが、発作的な何か、突発的な何かというの起こりうるんだというのはその後からはこういうケースにであったときには常に考えるようにはしています。何が起こるか本人にもわからない、何が起こるかわからない状況は、いつでも想定しておかないといけないんだなっていうのはわかりました。

住所がそこにない里帰り出産で、いずれ帰る人、帰る先にはもう連絡が取ってあるのに「なぜそんなにするの？」と言われて、「そうだな、いや、ちょっと違うんだよね」って、「うまく説明できないけど、何か違う」って感じだった。私が好きでこのお母さんにかかわっていると職場の同僚が思っていると苦しんだ時期もあった。私は何のためにこの家に家庭訪問して、お母さんの話を聞いているのだろうと思った時期もある。

とにかく、保健師をちゃんと認識してもらって、何かの時に連絡してくれるような位置に置いておかないといけないと考えた。「何かあったときに、すぐつながれるような存在でいたいから家庭訪問に行くんだ」と、自分に言い聞かせて支援した。

職場の上司や周りが支援をしていることを理解してくれていることが保健師として安心だった。「訪問回数多いけど、何も起こっていないけれど、訪問に行って来ます」という感じで、「ああ、わかったよ」みたいな感じであった。

一時保護になった週明けに上司に報告したら「よかったね」って言ってくれた。

感想：住民票がない場所での支援は、保健師の側にとっても一時的、中途半端になりがちである。このケースは母親の表情や言葉の端々から母親のもやもやとした感情をくみ取り、保健師が自分の担当ケースとして支援を続けていた。ケースが切羽詰まった時に電話をする場所があったことが、子どもと母親のいのちを救えたと考える。

（小笹）